

## オースティンの言語行為論について

### ——発話から生まれる自己——

08H1075 豊巻奈緒子

本論考における私の主眼は、日常においてなされる言語行為ないし発話行為を自己定立の装置として捉え直すことである。その出発点として設定したのは、J・L・オースティンによって提唱された「言語行為論」だ。彼の業績の注目すべき一面は言語分析、特に日常言語と呼ばれる範疇に属している。彼が積極的に建設しようとした手法は、日常言語の中の重層する区別の実態をあばき出し、そこに張られた網にかかった哲学的問題を解決に導くというものである。その手法に習い、言語行為における発話構造の考察から「顕在的自己」の現出の仕方について探り、そこから現代社会に見られる哲学的諸問題に迫る。これが本論考全体における私の試みである。

第一章では、オースティンが提唱した「言語行為論」の内容について吟味する。過去、多くの哲学者たちはあらゆる文が無条件に真偽のいずれかを示すもの、すなわち事実を記述する役割を担う陳述文であると考えていた。しかし、オースティンはこの傾向を「記述主義的誤謬」として批判し、新たに「事実確認的発言」と「行為遂行的発言」という区別を導入する。ここで注目すべきは、行為遂行的発言がもつその性格である。この種の発言は儀礼的ともいべき性格を有し、他者に対し自己の信望をかけるような発言である。ゆえに、それは当の行為そのものとしてみなされる。したがって、発言における評価基準なるものは事実上の真偽に依存するのではなく、「全体の文脈」に依存するのである。

さて、この「文脈」を考慮するうえで我々が見逃してはならないのは、これが有している両義性である。文脈は「私」から語り紡ぎ出されるものでありながら、一方で「私」という存在をも内属させている。つまり、二重の仕方で存在しているのだ。かくして私は、言語行為に関する議論を<主観/客観>、<能動/受動>という領域へと発展させる契機をここにおいて得ることになる。

また、行為遂行的発言に関するオースティンの主張の背景には、話し手を「責任主体」と捉える見方がある。言語行為論の中で「自己」という存在を理解するためには、自己がいかにして責任主体となりうるのかという、その生起過程を探らなければならない。かくして、本論考のキーワードである「顕在的な自己の現出」は、以後「責任主体としての生起」と重なりを持って現れてくることになるのである。

第二章では、「言語行為論」と「物語り論」(野家啓一氏)の類似性を論じている。物語りの概念は、行為の連鎖を「出来事」という単位によって捉える前提の下に成り立っている。ゆえにそれは、時空間的な文脈の中であらゆる経験を有意味に秩序づける概念装置ともいえる。本章では、この「語る」という動詞が「行為遂行的発言」に属すことを確認するとともに、その発話構造が「言語行為論」をも内包するシステムを有していることを指摘することによって、両者の入れ子関係を強調する。

この議論において第一に着目するのは、物語りによる「自己制作」機能が「行為遂行的」機能と共通する特性をもつ点である。この類似性は、発話主体である「私」が言語行為の場にかんして成立しているかという観点において捉えることができると思われる。「語る自己」はまさに語りを遂行している主我として、他方「語られる自己」は自己客観化された客我として生起し、それらの統合体として「私」は存在する。つまり、発話主体である「私」とは、あるひとつの物語りに組み込まれることによってそのアイデンティティを確立する「自己」なのである。私はここに、オースティンの議論における「責任主体」に通ずる構造を見ており、行為遂行的性格を持つあらゆる言語行為もまた、主我と客我を媒介し繋ぎとめる自己定立の装置として機能しているのではないかと考えている。

その考察に加えて注目するのは、自己は独立の実体としてではなく関係として現れるという点である。私たちは普段、ただ一人独立な「私」として生きているような感覚を持っている。しかし実際には、私たちは絶えず「他者の承認」を必要としており、そこにおいてはじめて端的な私は顕在的な「私」としての位置を占めて文脈中に現出してくるのである。この理論は、言語行為に関しても同様ではないだろうか。他者のまなざしに曝されてこそ、その意味が伝達・表出されるはずである。この議論を「潜在的他者」「無規定箇所」「能動と受動」という概念を用いながら発展させ、総じて「自己」なる存在が他者との共同制作によって生起してくることを論じる。以上が第二章の構成である。

第三章では、大森荘蔵氏の「想起」に関する考察をもとに、言語行為における「文脈の反省の仕方」を考察している。想起とは、「過去」の知覚体験の再現ではない。つまり、独立に過去なるものがあるのではなく、それはただ言語制作によってのみ表現されるものである。とするならば、過去の実在性は言語ゲームによって付与されるのであり、あらゆる命題は「文脈」によって了解されることになる。私はここにオースティンの言語行為論との共通項を見ているのである。もし、「反省」という観点でこの「文脈」を捉えれば、私達は主観的視座を突破しなければならず、同時に客観的視座が要請されることになるだろう。また、これに引き続いて得られる「慣習パターン」の把握、すなわち三人称的視座に関しては第四章で言及する「相互行為としての発話」の理論を暗示している。

では、想起される過去に対し、それを想起する「今」と、その想起主体である「私」は、いかに理解されるべきなのだろうか。まず、今現在を直線状のある一点として考えてはいけぬ。なぜなら、一点である今を追えば「今、今、今」の渦に巻き込まれて目眩みするだけだからである。むしろ、「～中」という長短様々な持続をもって存在しているものとして「今」を捉えることが重要だ。この理論は、第二章に言及した「出来事」の概念を「ゆるやかなひとしきり」という認識に置き換えればイメージしやすい。このように第三章では「今」の恒常的生産性および流動性に着目し、「過ぎゆく今」の反省の仕方について言及する。また、この「今」が他ならぬ「自己」において立ち現れているものであり、自己言及的に「いま・ここ」を自覚し、反省し、提示しうる私こそが「顕在的自己」たりうる存在であることを最終的に強調する構成となっている。

第四章では、本論考の前半部を通して考察した言語行為システムを現代社会に投影し、論じている。言い換えれば、オースティンが展開した「言語行為論」の枠を超える応用的な作業である。つまり、現代におけるメディアを媒介としたコミュニケーションを中心に「発話」に関して再考を試みるのだ。現代における電子通信技術は、近年に至るまでに目まぐるしく発達してきた。その動向に伴って生じたのは「直接対面的な手続きを踏まない情報伝達の増大」である。こうした時空間を共有しないコミュニケーションは「他者の不在」という現象を生み、これを論じるにあたって必要不可欠なのは、「非対話型」「非同期型」というメディアの特質を注視することである。ここで私が試みるのは、話し手と聞き手にとっての「空白の時間」、ツイッター等における「第三の空間」の生起という諸問題を、言語行為に関わる現象として説明することである。オースティンの議論に則して、話し手と聞き手との間で両者の理解・解釈を結びつける何らかの働きを「発話内の力」と捉えるならば、「他者の不在」を内在させたコミュニケーションはその「力」を希薄にするとされる。このことは、非対面的な関係の中では双方向の情報の流れが十分に確保されないという事態に起因する。「文脈の共有」が困難であることはすなわち、能動受動の合致が実現困難であることを示唆していると思われる。言語行為が言語ゲームとしての機能を希薄にすれば、使用規則および双方の理解が収束しないことにもつながる。ゆえに、私が設定した「第三の空間」は顕在的な自己が現出しづらい場所として想定することができ、そこはむしろ偽りの自己が生まれる場所、あるいは本来的な自己が隠蔽される空間と定義できるかもしれない。興味深いのは、その空間が私達にある種の居心地の良さを感じさせ、そこに誘いこむ魅力を持っているということである。

本論考全体を通して私が示唆しているのは、言語行為それ自体をある種の相互行為として認識しなければならないことである。言わば、発話とはそれ自身が話し手と聞き手による分業活動開始の合図なのだ。こうした言語行為が十全に織りなされる所にこそ、「顕在的自己」は現れるのではないだろうか。その上で「文脈の共有」は、やはり必要不可欠な条件となりうるのである。しかし、本論考における結論は単に情報メディアを批判することなどではない。私が意図していることは、「他者の不在」を完全に克服することではなく、むしろそれが不可能であることを前提した上で、各自がその事実に対して関心を向ける態度を養うことである。

オースティンの議論は一貫して、「善い」という言葉の使用に関する判断基準に迫るものであった。つまり、日常の中の多くの言語行為が相互に関連を保っていることを理解する第一段階と、一般理論の可能な応用例を見出す第二段階を経て、最終的には「私達はなにを行うべきか」が問い直されているのである。そして、私の議論もまた、「発言に際して何が行われるべきか」という問題に迫るものであり、現代社会に生きる私達が「発話」をどのように捉えるべきか、さらに発話主体である「私」が言語行為を通していかに「自己実現」を果たすのかという現象学的かつ倫理的問いに向かっていくものである。